

幼稚園教諭・保育士養成課程における 造形活動のための教材研究（1）

— 子どもの成長発達と造形活動の関係を考察するための教材研究 —

Study of art teaching materials in childcare teacher training course (1)

— Trial productions to understand the relationships between Children's growth and art activities —

野村和弘

Kazuhiro NOMURA

I はじめに

保育実習、幼稚園教育実習を間近に控える時期になると、学生から子どもに与える教材についての質問が増える。保育、教育現場での実践体験が十分とはいえない中、部分実習や責任実習で任される造形活動をどのように展開していけばいいのか模索する姿が例年みられる。しかし、これは保育士、幼稚園教諭を目指す学生に限ったことではなく、保育の現場を訪れると現職の保育者からも子どもとの造形活動のあり方について助言を求められることが多く、保育者が常に造形指導に悩んでいることに気づかされる。表現領域において造形活動の重要性は理解されながらも、実際の子どもの活動の中では、どのような教材を選び、どのように指導すべきか、そして、その課題のねらいをどこに置き、そこでの保育者の役割とは何なのかを明確に認識できずに造形活動に携わっているように思われる。

保育現場での絵画活動や造形活動の中で特に気にかかるのは、「やらせればできる」という保育者の信念のもとに、理想的な出来ばえを求めるあまりに難度の高い到達目標を設定し、結果的に子どもたちが達成できなかつ

たことに悩む姿である。これは年度末の作品発表会で学習の成果の現れた作品を展示し、保護者に教育の成果を見せたいという保育者側の都合を優先せざるを得ない状況が招いていることも要因の一つであると思われるが、ここで問題視したい点は、保育者が子どもの成長具合を軽視し、担当する子どもに適した教材や課題の難度を臨機応変に調整することなく提供していることである。子どもが実年齢に達していても、その課題を行えるほど成長具合が発達していない場合に、「やらせればできる」という保育者の信念は、保育者の過剰な指示や指導のもと、子どもの表現を画一的なものにしてしまい、表現活動の楽しさ自体を失わせてしまう恐れがある。『幼児造形の研究－保育内容「造形表現」』（注1）では「題材の提示や造形活動の内容、支援や評価は、事前に計画を立てることに加えて、保育の展開の中で子供たちの活動の様子を理解して適切に対応するものである。教材の魅力によって子どもたちの興味・関心や工夫が引き出される」と述べられており、子どもの実態を十分に考慮した教材の提供が重要であり、その意識が保育者には必要不可欠なもの

と考える。

本研究は、保育者を目指す学生が、保育士、幼稚園教諭養成課程の授業における教材研究を通して「子どもの実態から教材を考える」という意識を、保育者として現場に立つ前に、学生が身につけることの重要性を示すものであり、教材研究の取り組みを通しての学生の意識の成長についての考察である。

II 教材研究（取り組み）の方法

今回、教材研究を通して「『子どもの実態から教材を考える』という意識を養う取り組み」を行ったのは、2年次の6月と10月に「保育所実習」を体験した3年次の学生で、（注2）【取り組み段階1】として、「実習先で体験した造形表現活動（絵を描く、工作など）および感想」について記述させ（注3）、その内容をもとに、学生が「子どもとの造形表現活動のあり方」に対してどのような点に着目しているのか、意識調査を行った。特に、「現場に立つために、『造形表現活動』について学生のうちにどのようなことを身につけ、学んだりしておくべきだと思うか」という設問に対する回答に焦点をあて、子どもたちと造形表現活動を行う場合の「学生の意識のあり方」を明らかにする。

その上で【取り組み段階2】として、「同じモチーフで難度の異なる造形表現活動（教材）の試作・比較」を通して、「各教材の難度の特徴と子どもの成長発達との関係」について学生に考察させることで、どのような取り組みが必要で、どのような保育者としての意識が重要なのかを検討させる。

III 実践結果と考察

1. 「教材研究（試作・比較）」をする前の学生の意識

本学科では、1年次に「図画工作A」「図画

工作B」、2年次に「保育内容（表現・美術A）」「保育内容（表現・美術B）」の演習の授業を開講しており、学生は表現造形活動の基礎的な知識や技能を、「保育原理」「幼児教育学」等の授業で子どもの成長発達についての基礎知識を学ぶ。2年次の6月と10月に保育所実習を体験し、保育現場における造形表現活動を体験したことで、将来、現場に立つことに対する学生の意識はより現実的なものに近づいたといえる。

(1) 設問と回答

【取り組み段階1】として、2年次の保育所実習で体験した表現造形活動についての内容と感想を以下の設問で記述させた。

- ① 保育所実習ではどのような表現造形活動（工作、絵を描く等）に参加したり、体験したりしましたか。
- ② 上記の活動で、初めての現場実習で子どもとの活動を行う上で、どうしたらいいのか困ったことはどのようなことでしたか。
- ③ 任された表現造形活動に対して、どのようなことから始めて、どう準備しましたか。
- ④ 現時点で、現場に立つために、『造形表現活動』について学生のうちにどのようなことを身につけ、学んだりしておくべきだと思いますか。

回答を行なった学生は、172名（注4）で、「同じモチーフで難度の異なる造形表現活動（教材）の試作・比較」という教材研究を行なった前後の学生の「『子どもの実態から教材を考える』という意識」の変化を調査するために、本稿では特に設問④に焦点をあてる。

保育実習を体験した学生が「学生のうちに身につけたり、学んだりしておくべきこと」と考えた意見は、設問①②③を反映する形と

なり、現場で学生が必要だと感じたり、困ったりしたことが記述され、体系的に集計すると以下の結果となった。（注5）

○ 教材・題材のレパートリーの習得	26.2%
○ 発達段階・成長具合の知識	15.4%
○ 教え方・援助の仕方・声かけの仕方	10%
○ 道具／素材の使い方	9.6%
○ 効率のいい進め方にコツ	3.8%
△ その他	2.2%
◎ 子どもの年齢に合った教材・活動	18.3%
◎ 子どもの年齢に応じた援助の仕方	5.3%
◎ 子どもの発達に応じた教材の工夫・アレンジの仕方	2.4%
◎ 子どもの個々に応じた援助の仕方	2.4%
◎ 子どもの年齢に合った難度	1.4%
◎ 下準備・教材研究の大切さ	1.4%
◎ 子どもの立場に立った教材研究	0.4%
◎ 苦手な子どもへの対応方法	0.4%
◎ 進度が異なる場合の対応の仕方	0.4%
◎ 造形活動の楽しみ方を自分で知る	0.4%

(2) 分析

記述された意見からは、保育実習において実習生としての学生が、保育者の手伝い、部分実習、責任実習を通して、様々な表現造形活動を体験したことで、保育者として身につけるべきことや、学生のうちに学んでおくべきことを、将来に向けてそれぞれ考えていることはいかがえる。しかし、「◎」で示されたような「子どもの成長具合への考慮の重要性」や「子どもに与えることへの考慮の重要性」を強く意識した意見提示は全体の「32.8%」にとどまり、「○」や「△」で示した「67.2%」の意見は、「漠然とした必要性」や「指導者側の都合の重要性」を優先したもので、子どもが活動することに携わることへの意識が希薄な意見提示となり、3年次の4月の段階では、「子どもの実態から教材を考える」という意識は学生にはまだ育成されて

いないことがうかがえる。また、全体の「45.6%」の学生が「『発達段階・成長具合』を考慮することの大切さ」を理解しているようだが、それがなぜ必要なのか、そして、その考えを基に「子どもの実態を考慮すること」がなぜ重要なのか、については大半の学生はこの段階では理解しきれていないと推測できる。「子どもの実態から教材を考える」ことを学生自身が意識できるようになることは、表現造形活動を行う子どもへの寄り添った配慮ができる保育者を目指すためには必要不可欠なものと考えられる。この意識をもつことが、子どもたちが達成感をもてる活動を展開することにつながるのである。

そこで、「子どもに与える教材の試作・比較」を通して、「各教材の難度の特徴と子どもの成長発達との関係」について学生に考察させることで、どのような取り組みや準備が必要で、どのような保育者としての意識が重要となるのかを検討させる。

2. 「教材研究（試作・比較）」の学生の実践

今回、子どもの成長発達と与える教材との関係について、学生に「子どもの実態から教材を考える」意識を養わせるために選んだ題材は、「季節の行事を楽しむ」という活動の中での「七夕飾りを作る-おりひめとひこぼし-」の制作活動で、難度を4段階に設定した教材を試作・比較することにより、「それぞれの教材の特徴」と「子どもに与える場合の留意点」について考察・検討を行わせるものである。学生に取り組みせる教材は便宜的に難度を4段階に設定したもので、以下の4つとした。

- ① 「織姫・彦星の全体を画用紙に印刷したもの」（年少）
- ② 「織姫・彦星の頭部を画用紙に印刷したもの」と「折り紙の体部」（年少／年中）
- ③ 「織姫・彦星の頭部を画用紙に印刷した

もの」と「トイレットペーパーの芯や紙コップの体部」(年中／年長)

- ④ 「織姫・彦星の頭部を画用紙に印刷したもの又は自分で描いた頭部」と「色画用紙を円錐状に立体化させる体部」(年長)

教材①を「クレヨンやパスで色づけを行うのみ」の最も簡単な制作活動に設定し、教材②は「クレヨンやパスで色づけした頭部と折り紙で折った体部を貼る」、教材③は「クレヨンやパスで色づけした頭部と折り紙で飾ったトイレットペーパーの芯や紙コップを貼る」、教材④は「クレヨンやパスで色づけした頭部、又は自分で描いた頭部と色画用紙を円錐状に立体化させ折り紙で飾った体部を貼る」という形で、作業過程と難度を段階的に変えたもので教材研究を進めた。

(1) 設定① (年少) の教材研究の実践

【準備するもの】

- ・織姫・彦星の全体を印刷した画用紙
- ・クレヨン／パス・風糸・穴あけパンチ

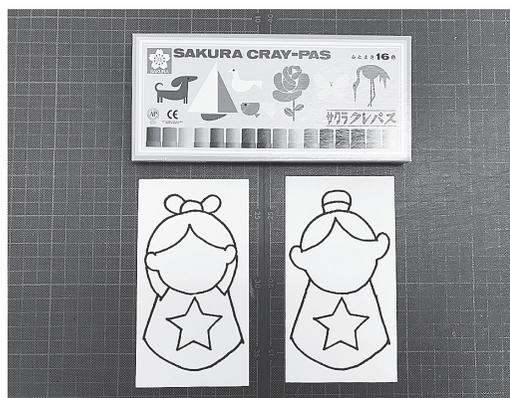


図1 設定①の準備

【制作手順】

- ① 画用紙に織姫・彦星を印刷したものを保育者がカットして用意する。
- ② クレヨンやパスで色づけし、表情を入れる。
- ③ 保育者が穴を開け、風糸をつける。(または、ホッチキスで風糸を留める)



図2 設定①の完成作品例

【学生の反応の具体例】

- ・年少組ではハサミをまだ使うことができないため、事前に保育者がカットして印刷物を用意しておく。また織姫、彦星どちらを選んでもいいように、余分に用意しておく。
- ・年少さんは力を上手く調節して塗ることができないため、クレヨン(パス)を使う。
- ・七夕飾りの制作は6月末に行うことを考えると、3月に3歳になったばかりの子もいるので、色を塗るだけの制作は年少に適している。
- ・力強く塗ると濃く、弱いと薄くなり、色塗りの力の入れ加減を体感できる。
- ・保育者が固定概念にとらわれないように、子どもの好きな色を使って塗らせる。
- ・余白部分に絵を描いたり、飾りを貼ったりするなどして、それぞれの好みを活かす。
- ・きれいに塗ることよりも色づけする楽しさを重視した声掛けをする。
- ・顔をどのように描くか戸惑っている子がいたら、大好きな人の顔を描いてみるように提案してみるのもいいと思った。
- ・導入段階で「七夕」を扱った絵本で読み聞かせをすると、子どもの発想や意欲を高められると思った。
- ・色塗りではみ出してもいいように、机の上にシートや新聞紙を敷いておく。

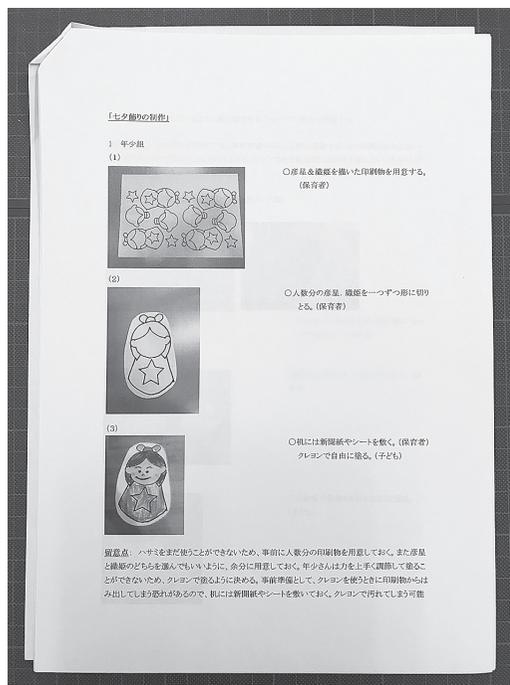


図3 設定①の学生のレポート例

【学生の反応についての考察】

「年少」というクラスの子どもに対して、「『ハサミ』をまだ上手に使いえない子どもも多い」という保育所実習の体験で学生自身が肌で感じ取った考えが反映された意見が、約8割を占めることとなり、用意された印刷物に色を塗るだけの課題が年少には適していると考えている。実際に子どもに接したことで、できることとできないことを保育者が見極めた上で、教材を与えることの大切さを再確認できているようである。そして、現場を体験することで、子どもの意欲関心を高めるための保育者の取り組みや、活動全体の流れを円滑に進めるための活動構成の重要性にも目を向けられるようになり、制作活動の環境に対する配慮もできるようになっている。また、「織姫はピンク系、彦星はブルー系」といった性別で色分けする固定概念に疑問を持ち、子どもに自由な色使いで自己表現させようとする教育的な姿勢もうかがえる。

(2) 設定②（年少／年中）の教材研究の実践

【準備するもの】

- ・織姫・彦星の頭部を印刷した画用紙
- ・星の形を印刷した画用紙
- ・クレヨン／パス・折り紙 ・のり
- ・風糸 ・セロハンテープ

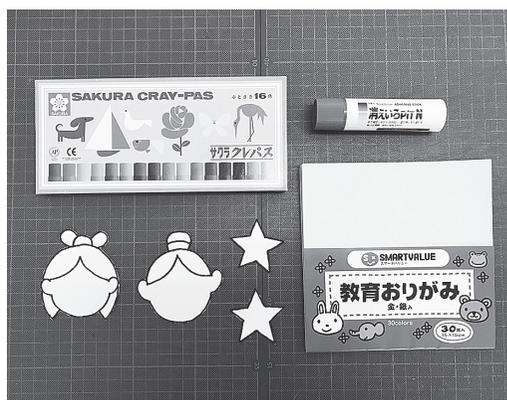


図4 設定②の準備

【制作手順】

- ① 画用紙に印刷した織姫・彦星を頭部と星の形を保育者がカットして用意する。
- ① クレヨンやパスで頭部と星に色づけする。
- ② 折り紙を折って体部を作る。
- ③ のりで頭部を体部に貼りつける。
- ④ セロハンテープで風糸をつける。



図5 設定②の完成作品例

【学生の反応の具体例】

- ・折り紙はできるできないの個人差があるので、保育者の指導、援助方法が重視される。

- ・折り方を言葉だけで説明するのは難しいので、大きな紙を使って実際に目に見える形で説明するなどの工夫が必要である。
- ・折り紙で作る体部は、単純なものであれば年少クラスでもできると思った。
- ・子どもが塗りやすいように、スティックのりよりも、指ですくってつけるデンプンのりの方が作りやすいと思った。
- ・のりをつける位置をしっかりと伝える。
- ・3歳児は7月ではまだハサミを使い始めたばかりなので、頭部と星型は保育者がカットして与え、4歳児なら色づけした後で本人に切らせてみる。
- ・設定①よりも制作工程が増えることで、「自分で作った」という達成感を与えられる。
- ・体の折りは、最初に説明する時には1つの折りに統一して教え、一人1体作ったら、別の折りを紹介したり、自分で考えて折ったりすることを提案してみる。

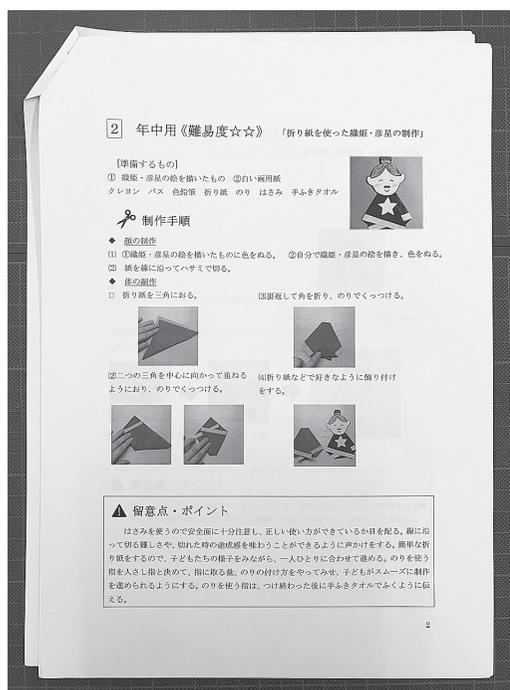


図6 設定②の学生のレポート例

【学生の反応についての考察】

学生自身が先に試作した設定①と比較できることから、子どもの成長具合と課題の難度の関係について、より掘り下げて考える意識に基づいた意見がみられるようになる。折り紙を折って体部にするという工程に対して、『重ねるように単純に折る』だけでなく年少児にも可能となり、より能力が高まっている年中児には異なる折り方を体験させることも可能となる」ことなど、より発展的な教材提供のあり方も考えられるようになっていたり、制作活動を通しての子どもの達成感や満足感についても考慮できるようになっていたり、学生が保育者としての立場から発言も見られるようになってきている。また、スティック状のノリがいいのか、指で扱うデンプンのりがいいのか、年少、年中の子どもに合った材料のあり方にも意識を傾けられるようになってきていることも、試作という教材研究を通しての学生の成長が垣間見られる。

(3) 設定③(年中／年長)の教材研究の実践

【準備するもの】

- ・織姫・彦星の頭部を印刷した画用紙
- ・星の形を印刷した画用紙
- ・クレヨン／パス・折り紙 ・のり
- ・トイレットペーパーの芯／紙コップ
- ・ハサミ ・風糸 ・セロハンテープ



図7 設定③の準備

【制作手順】

- ① 織姫・彦星を頭部と星の形を印刷した画用紙を保育者が用意する。
- ① クレヨンやパスで頭部と星に色づけする。
- ② 色づけした頭部と星をハサミで切り抜く。
- ③ トイレットペーパーの芯／紙コップにのりで折り紙を貼り紙を作る。
- ④ のりで頭部を体部に貼りつける。
- ⑤ セロハンテープで尻糸をつける。



図8 設定③の完成作品例

【学生の反応】

- ・実際に作ってみると、トイレットペーパーの芯や紙コップに折り紙を貼るのは難しく、特に大きな紙(15x15cmの折り紙)をそのまま巻きつけて貼るのは難しいと感じた。そのため小さく切った折り紙の紙片を貼るなどの工夫も必要だと思った。
- ・長さ10cmの円筒のトイレットペーパーの芯に15x15cmの折り紙をそのまま貼るには余りが出てしまい、きれいに貼るのが難しかったので、トイレットペーパーの芯の長さ(10x15cm)に切った折り紙を用意して子どもに使わせるといいと思った。
- ・トイレットペーパーの芯に折り紙を巻いてのりづけをするときに、どこにのりをつけたらいいのか、芯と折り紙のどちらにのりをつけたらやりやすいのか、試作してみて初めて気づくことが多く、子どもが仕上げ

やすい方法を探しておくべきだと思った。

- ・教材研究をしてみると、のりをつける部分やのりの量の調整など、子どもに与える前に保育者が知っておくべきことが多いことに気づいた。年中児ではそれまでにのりを使う機会があると思うが、改めてこの制作時に、のりの伸ばし方やつける量などについて確認するのもいいと思った。
- ・トイレットペーパーの芯に折り紙をはるのが難しい場合は、マーカーなどで色づけることと折り紙の飾りをつけることの併用もいいと思った。
- ・トイレットペーパーの芯に折り紙を貼ってから細部を飾っていくのは曲面で難しいので、飾りをつけた折り紙を貼るようにした方が仕上げやすいと思った。
- ・顔は別物を貼るのではなく、トイレットペーパーの芯の上部を頭部にして、「折り紙の帯を巻きつける」という作業だけで全体を仕上げる課題にしてみる。

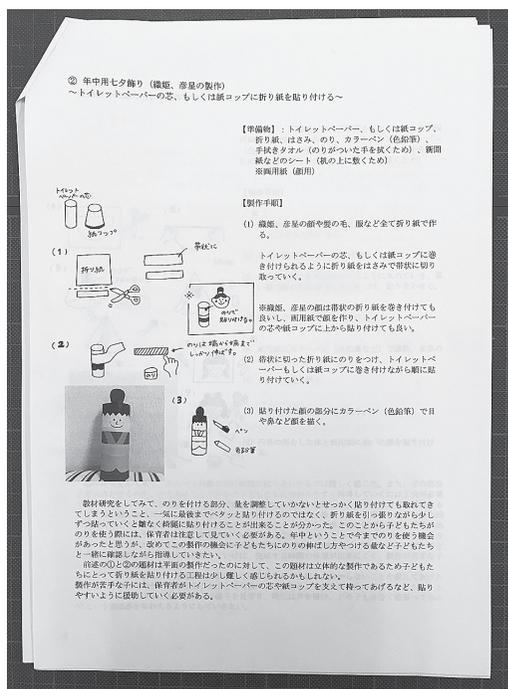


図9 設定③の学生のレポート例

【学生の反応についての考察】

設定③の制作がより立体的な作業になってくると、折り紙を貼って飾るだけの単純作業と考えていた学生も、曲面の円柱に折り紙を貼ることが難しいことに気づき、子どもに与える前の教材研究の重要性に意識を向ける意見が多くなってくる。15x15cmの折り紙をそのままの大ききで巻きつけると円筒の両端に折り紙があまり、その処理に困る姿が試作中に確認できた。円筒の両端の内側に折り込む者やハサミで切る者が多い中、小さくちぎった折り紙を貼る飾り方や円柱と同じサイズに切った折り紙を用意することを提案する者も現れ、子どもが取り組みやすくするにはどのような課題提供の仕方がいいのかという見直しの意識が強くなってきている点は、この試作という活動の成果となっている。

また、「円筒に折り紙を貼る」という作業の中で、大半の学生が「のりの扱い」が難しいことに改めて気づくこととなり、のりは折り紙と円筒のどちらにつけた方がいいのか、さらに、円筒につけるならどの位置にどれくらいの量をつけたらいいのかなど、保育者側の自分がやってみて困るところは子どもも困るところとして教材研究を深めている姿は、教育者となる学生の成長とも受け取れる。のりをつけた折り紙を円筒に貼るよりも、のりをつけた円筒を折り紙の上に転がして貼る方が、子どもにはやりやすいことを探り出す者や、のりの扱いをしっかり学ばせるために円筒に折り紙を貼るこの課題を行うことの意義を見出す者も現れ、これらの学生の教材のあり方や与え方について多面的に捉えようとしている姿勢は、作業過程の多い教材の試作に学生自身が真摯に取り組んだことにより育成されたものといえ、子どもに与える前の教材研究・試作に指導・援助するための重要性を学生に認知させられる取り組みになったとい

える。

(4) 設定④（年長）の教材研究の実践

【準備するもの】

- ・織姫・彦星の頭部を印刷した画用紙
- ・星の形を印刷した画用紙
- ・円錐を作るために半円を印刷した色画用紙
- ・クレヨン／パス・折り紙 ・のり
- ・ハサミ ・風糸 ・セロハンテープ

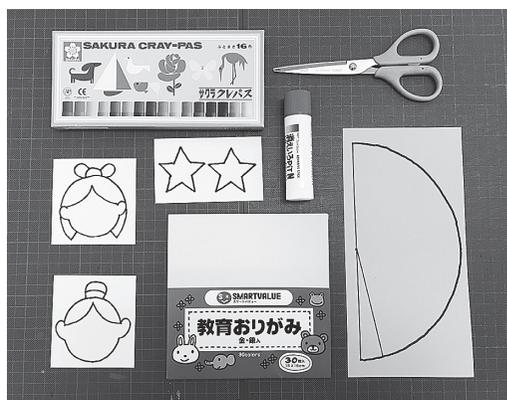


図10 設定④の準備



図11 設定④の完成作品例

【制作手順】

- ① 織姫・彦星を頭部と星の形を印刷した画用紙を保育者が用意する。
- ② クレヨンやパスで頭部と星に色づける。
- ③ 色づけた頭部と星をハサミで切り抜く。
- ④ 色画用紙に印刷された半円をハサミで切り取り、円錐状に立体化させて体部を作る。

- ④ 折り紙をのりで貼り，体部を飾る。
- ⑤ のりで頭部を体部に貼りつける。
- ⑥ セロハンテープで風糸をつける。

【学生の反応】

- ・教材研究をしてみても，大人でも円錐の形にきれいに色画用紙を丸めることは難しいと感じた。どう丸めていくのか，どの部分を重ね合わせるのか，子どもたちにわかりやすく指導していくためには工夫が必要であるとわかった。普段の制作では一斉に同じ工程を行うことが多いが，今回の題材ではグループに分け，1グループずつ保育者が円錐の体部の作り方を指導していった方がいいと考える。指導を受けていないグループは頭部の色塗りを進めさせていけば，苦手な子にも丁寧に援助ができると思った。
- ・実際に制作してみると，円錐の形になるように色画用紙を丸める工程は難しいので，保育者が一度全体に作り方を見せてから，各班を回りながら再度やり方を見せ，できない子には個別に援助できるようにする。
- ・飾りによっては，円錐状にする前に飾りつけた方が，のりづけしやすかった。
- ・円錐状にする際に，どれくらい丸めてのりをつければいいのか，判断が難しいので，その目安を保育者が教材研究で見付け出し，のりしろを作る工夫は重要だと思った。
- ・年長ということもあり，友だち同士で助け合う姿も見られると思う。全て他の子にやってもらうということがないように子ども同士の様子を見守り，声掛けしながら，どの子どもにも自分で頑張ったという達成感を味わわせられるようにしたい。
- ・円錐状にするのは難しいので，クラスに子どもたちの成長具合をみて，より難易度を下げた題材提供も大切だと思った。
- ・平面から円錐型にすることは，のりづけが難しいと感じた。いきなり七夕飾りの制作

で円錐を作るのではなく，別の遊びの一環として円錐を作る練習をしておくと思えばよりやりやすくなると思った。

- ・白い画用紙に自分で織姫と彦星の顔を描くことはできない子には難しいと思ったので，顔が印刷されている画用紙との自分で描きたい子用の白い画用紙との両方を用意すると，制作の幅が広がると思った。
- ・自由に織姫・彦星の顔を描いていいと言われても，思い浮かばなかったり，迷ったりする子どもがいることを想定して，イラストや絵本をいくつか用意しておく。
- ・立体的な飾りを自分で作ることはより難度が上がった作業となり，説明の仕方もより高度なものとなり難しい言葉を使ってしまうがちになってしまう。「ハサミでチョコキチョコキ切る」「のりはしっかりくっつくようにギュッとおさえて貼ってね」など，オノマトペの活用や力のかけ具合もていねいに説明することが大切だと思った。

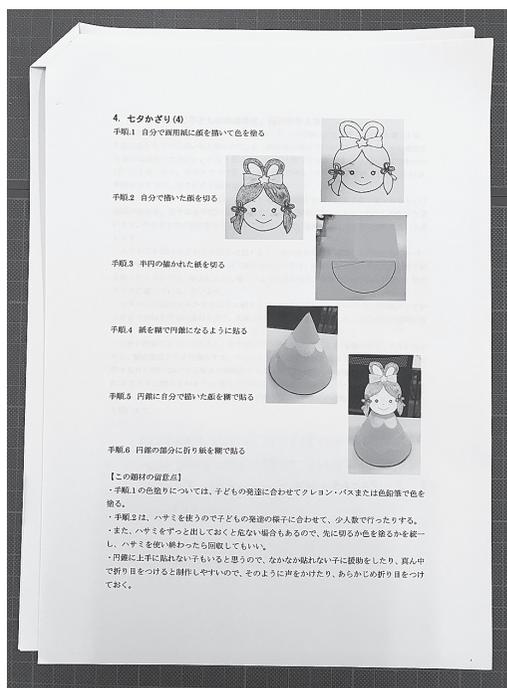


図12 設定④の学生のレポート例

【学生の反応についての考察】

年長向けということで、設定③より少し難度が上がった程度の題材として試作してみたが、学生たちにとっては想像以上に考慮すべき点が多く含まれるものとなり、子どもに与えるにはどのような配慮と工夫が必要となるのかを、踏み込んで考える取り組みとなったようである。一枚の紙を立体化させるだけであるが、円錐状にしなければならない難しさを体験することで、全体への一斉指導よりも、グループ分けして個々のグループへの個別指導の方が制作の要点を伝えやすいことを提案したり、日常生活において子ども同士で助け合いができるようになるという成長具合を考慮した活動の進め方を提案したりと、難しい工程をいかに子どもに達成させられるのかを現実的に考えようとしていることが分かる発言となっている。また、担当するクラスの子どもの成長具合を考慮して、与えようとした題材の難度が高くて子どもに合わないようなら、難度を少し下げた教材を提供する方が子どもにとって満足感を感じられる活動となることになるのではと、試作から子どもの成長具合と造形活動中の学習の達成感との関わりにまで考察を深められた点は、保育実習の経験を糧に学生自身が保育者としての役割を踏み込んで意識できるようになったといえ、学生にとって子どもの成長具合と教材の難度の関係について考察を深めさせることに一定の成果がみられた。

3. 『教材研究（試作・比較）』後の学生の意識』の分析

「取り組み段階2」で、同じモチーフで難度の異なる造形表現活動（教材）の試作・比較を行い、教材研究のまとめとして学生たちは「各教材の難度の特徴と子どもの成長発達との関係」について考察し、意見をまとめた。今回の保育士・幼稚園教諭養成課程にお

ける学生の取り組みの成果について検討してみる。

設定①から設定④までの教材研究を行った上で大多数を占める学生が重要視した点は、

「子どもの成長具合に合わせた教材提供の重要性」であり、それを認識するための「子どもに与える教材の試作の必要性」である。

- ・「発達段階や子どもの成長具合の違いで、できることが違ってくるところを、試作することで実感できた」
- ・「年齢の違い、月齢の違いでできることとできないことを、保育者がしっかり把握してから教材提供を行うことが重要となることを、試作することで改めて認識した」
- ・「試作することで、初めて子どもの視点で課題の内容について深く考えられるようになった」
- ・「試作をして事前準備をしっかりとしておく、急な子どもの発想にも慌てずに対応できるようになると思った」
- ・「クラスの子どもの実態、成長具合を十分に把握しながら、無理なく活動の達成感をもたせられる教材選びが大切だと思った」
- ・「教材集に示されている対象年齢をそのまま受け取るだけでなく、担当した子どもの実態に合わせて工夫や調整が必要となることを、試作することでよく分かった」

などの意見がみられ、子どもに造形活動の楽しさや満足感を味わわせるためには、保育者が担当する子どもの実態を十分に把握した上で、子どもの成長具合に合わせて教材提供をすることの大切さを確認できたようである。そして、子どもに与える教材自体の難易度や子どもの成長具合との適合性について保育者が丹念に把握するためには、「試作」という教材研究の重要性を改めて実感したようである。しかし、これは裏を返せば、今回の教材

研究に取り組むまでは、学生たちが子どもとの造形活動を行うための教材研究や試作を軽視し、教育に携わる上での重要な段取りとして考えてこなかったことの現れでもある。将来的に保育者として表現造形活動に携わるためには教材準備が大切であることは知っているが、3年次初頭では「教材集に紹介されている対象年齢を参考に造形活動を展開していくことが適当である」と考えがちであり、その教材が実際に担当している子どもの造形活動として適切かどうか熟考するまでには至っていないのが実情である。今回の試作・比較の取り組みから、子どもの実態を考慮するのであれば教材集に安易に頼ることは適切とはいえないことを学生自身が見出し、子どもに与える内容の把握のために試作という教材研究の必要性を深く理解できたことは、保育者となる学生の意識の変化、成長を促す結果に結びついたといえる。

約8割の学生が保育者となる自覚をもって教材研究に取り組み、「子どもの実態から教材を考えて与える」ことについて各々の考察を深めることができた一方で、「教材研究の大切さを知った」「発達段階を考えることは大切だと思った」などと単純にまとめるに留め、なぜそれが大切なことであり、保育者として考慮すべきことなのかを十分に掘り下げられない学生も2割ほどいた。これは表現造形活動に対する意識の希薄さというよりも、子どもに達成感と与えられる活動を提供しようとする保育者としての意識や配慮の欠如がもたらしたものともいえる。今回の取り組みでは、現場に立つことを念頭に保育者の立場から教材のあり方を検討できた学生たちは、「教材研究（試作）の重要性」「子どもの成長具合の実態に合わせた教材提供の重要性」を理解した上で、教材の準備の仕方、教材の発展のさせ方、支援・声かけの仕方、制作環境

の整え方、想像以上の子どもの発想への対応など、各々が実際の子どもの活動に反映させようとする意識の現れが確認でき、その姿勢と踏み込んだ着眼点は、考察を深めきれなかった学生たちにも良い刺激を与えるものとなり、その後の幼稚園教育実習での造形活動への下地作りとなったといえる。

Ⅳ おわりに

本研究は、「子どもの実態から教材を考える」という意識を保育者となる学生に身につけさせるための取り組みであった。保育者を目指す学生が、幼児期の表現造形活動における「与える教材と子どもの成長具合の関係」に対して、どのような認識と理解をもっているのかを調査し、「教材の試作・比較」という教材研究に取り組んだ学生の「子どもの実態から教材を考える」という意識のあり方について検討したものである。

「表現」に対する配慮事項として、幼稚園教育要領では「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の用事の表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」（注6）を、保育所保育指針では「身近な自然や身の回りの事物に関わる中で、発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせることを楽しむ遊びや素材を用意するなど保育の環境を整えること」（注7）を示している。

これらから、表現造形活動に関わる保育者の役割は、子どもの成長具合の実態を考慮しながら、子どもが楽しく造形活動に取り組めるように教材や環境をしっかりと準備することであり、その意識を身につけた上で子どもとの活動を進めることは大切なこととなる。

今回の取り組みの主題となる「子どもの実態から教材を考える」という意識は、実際に様々な子どもとの造形活動の積み重ねにより保育者の中に強化されていくものであろう。

教材集の実践例をそのまま担当している子どもに与え、理想とする成果が出ないことに苦慮するのではなく、それぞれの子どもの発達、成長具合に応じた教材づくりと提供を心がけ、子どもが行う造形活動の理解者、援助者を目指して欲しいと願っている。



図13 教材研究の取り組み風景

育の現場で実際に子どもと活動する上で、何か困ったことはありましたか。③何か任された活動について、どのようなことから始めて、どのような準備をしましたか。④現場に立つために「造形表現活動」について学生のうちにどのようなこと身につけたり、学んだりしておくべきだと思いますか。

- 4) 筆者が勤務する4年制大学の保育士・幼稚園教諭養成過程にて「発達美術論(演習)」を履修し、調査に回答した172名の学生(2018年度94名, 2019年度78名)。
- 5) 複数回答に対する集計全体の割合提示。
- 6) 幼稚園教育要領(平成29年3月31日文部科学省告知第62号)
- 7) 保育所保育指針(平成29年3月31日厚生労働省告知第117号)

参考文献

- 1) 横 英子：保育をひらく造形表現，萌文書林(2018)
- 2) 無藤 隆，浜口順子：新訂/事例で学ぶ保育内容/領域表現，萌文書林(2018)
- 3) 樋口一成：幼児造形の基礎－乳幼児の造形表現と造形教材，萌文書林(2018)

注

- 1) 幼児造形の研究－保育内容「造形表現」，萌文書林(2014)，辻 泰秀(編集)
- 2) 筆者が勤務する4年制大学の保育士・幼稚園教諭養成過程にて2年次に「保育所実習を体験し，3年次の「幼稚園教育実習」を行う前の学生。
- 3) 調査質問内容①「保育園実習」で，どのような造形活動(工作，絵を描く等)に参加したり，実際に担当したりしましたか。②上記の活動について，初めての保